

## 山村暮鳥にとつてのキリスト教

早 川 京 華

### はじめに

山村暮鳥は、本名を志村八九十といい、明治十七年、群馬県の農家に長男として生まれた。暮鳥の生まれ育つた家庭は、非常に陰鬱としており、笑顔がない家庭であつた。暮鳥自身も自身の生まれ育つた家庭のことを、自伝「半面自伝」(大正六・八『詩歌』)において、「大きな家は陰鬱でいつもごたごたしてゐた。他家のように自分の家では笑ひ声一つ立てるものがなかつた。」<sup>(註一)</sup>と言つており、暗い家庭で過してゐた事が伺える。

暮鳥の文学の芽生えについてだが、「半面自伝」において、「父方の祖父さんで晩年行衛不明になつた人は名高い儒者であつたと聴く。詩もつくり書も善くした。自分に引いた文学的系統はそんなところから来たのであらう」<sup>(註二)</sup>と語つてゐる。さらに、「父が出奔したので自分は赤城の黒松獄の神官で、前橋に居住してゐた叔父のところにあづけられた。」「それが培はれ且つ芽生えたのはまつたく神官なる叔父の机の傍においてであつた。」<sup>(註三)</sup>と、自身の文学への関心を培つた存在についても語つてゐる。

明治三十三年、暮鳥が十六のとき、前橋聖マツテア教会で英語の夜学校が開設された。暮鳥は開設と同時にこの夜学校に通ひ、英語の勉強に励むこととなる。この時期に、暮鳥の洗礼のきつかけをつくつた、ウォール嬢と知り合う。暮鳥は本来、英語の勉強のために学校に通つていたが、後に洗礼を受けることとなる。このことに関する資料は乏しいが、キリスト教に対する興味から、その世界に飛び込んだものと思われる。

小説「十字架」(大正十一・三 聖書文学会)において、「かれは彼女に動かされた。それはひとびとの生活の迷信的なところがあきらかにされたからだ。日本在来の宗教の価値が疑はれてきたからだ。キリスト教がめづらしかつたからだ。」と書かれているところから、暮鳥のキリスト教入信にはウォールの存在が不可欠であったことがわかる。

暮鳥は、伝道師として活動する合間にも地方紙に多くの詩や短歌を投稿している。大正二年の五月には『三人の処女』(大正二・五 新声社)を自費出版し、大正四年に詩集『聖三稜玻璃』(大正四・十二 人魚詩社)を刊行、その三年後には、『風は草木にささやいた』(大正七・十一 白日社)を刊行する。大正十三年には『雲』(大正十四・一 イデア書院)の校正を終えている。

このように暮鳥は、詩人であり、クリスチャンであり、伝道師であった。様々な顔を持つ暮鳥であるが、本稿では、「暮鳥にとつてのキリスト教」に的を絞って考えていきたい。暮鳥にとつてのキリスト教はどのような存在であったのか、暮鳥の底を流れていたキリスト教について考えていきたい。

## 一 クリスチャンから伝道師となつた暮鳥

暮鳥はウォール嬢によつて心を動かされ、キリスト教に興味を持つことになる。当初は英語を学ぶために教会へ通つていたものの、「日本人の持たないものに依て精神的に物質的に常にかされた」結果、洗礼を受けるまでに至つた。明治三十五年六月、前橋聖マツテア教会で暮鳥は受洗したのである。この、「日本人の持たないものに依て精神的に物質的に常にかされた」という現象に関して、田中清光は『山村暮鳥』の中で、

「日本人の持たないもの」によつて「精神的に物質的に」(「半面自伝」初稿)動かされたという告白は、当時の青年たちのキリスト教入信にみられた、西洋文化との接触の窓口としての教会の魅力というものを如実に物語っている。とくにそれまで赤貧の境遇でときに肉親とも離れたり、冷酷な世間を知つて育つた暮鳥にエキゾチックな教

会の雰囲気、そこでの「物質」や「精神」との接触には、十八歳という年頃からいっても人一倍魅力を感じさせるものがあつたであろうと想像される。<sup>(五)</sup>

と述べており、暮鳥も教会のもつ魅力に心打たれた一人であつた、だろうことを推測している。ここでいう「物質」とは教会で学んでいた「英語」のことで、「精神」とは、「ウォールやその周りの人間の人間性」のことではないかと考える。西洋文化との接触についても、暮鳥は幼い頃から新しいもの、珍しいものに対して非常に興味をもつ性格であつたため、西洋の文化という、いかにも自分が関わつたことのなさそうな分野には興味を持たざるを得なかつた、だろうと考える。

当時の暮鳥は、群馬の堤ヶ岡小学校の教師をしていたが、入信をきっかけに「ヤソ」と呼ばれるようになる。「ヤソ」というのは、『日本国語大辞典第二版』（平成十四・一 小学館）によると、「やそ【耶蘇】はキリスト教。またキリスト教の信者」<sup>(七)</sup>とのことである。この引用は、今回用いた「ヤソ」という言葉に対する説明であるが、この説明には差別的な要素は含まれていないようにみえる。だが、暮鳥が実際にいわれた「ヤソ」というのは、差別的な意味が含まれていたのではないかと考える。暮鳥が生きていた当時は、キリスト教はまだ珍しいものであつた、だろうし、その中で外国人であるウォールと親しげにしていたら、奇妙な目で見られてしまうかもしれない。そう考えたため、暮鳥に投げかけられた「ヤソ」という言葉は差別的な意味合いが含まれているのではないかと考える。さらに、暮鳥が受洗した年の夏、ウォール嬢は青森の聖アンデレ教会へ転任となる。すると暮鳥は教師を辞め、ウォール嬢の後を追う。それに関しても、「男妾だ」という言葉を投げかけられたりした。

ウォール嬢の後を追って青森に向かつた暮鳥であるが、ここでは「もうその頃の自分にはキリスト教が邪宗伴天連ではなかつた。人々の生活の迷信的なところがあきらかになるにつれて日本在来の宗教の価値なきことが知れ、其上、愛の福音はすつかり自分を酒酔させてしまつてゐた。」<sup>(八)</sup>というように語っている。この「酒酔させ」という部分に対し、田中清光は「キリスト教が自分を「酒酔させ」たといつたのは、当時の若気を示す意味もあつたのかもしれない。」<sup>(九)</sup>と推測している。

明治三十六年には東京築地の聖三一神学校に入学する。その時暮鳥は十九歳であった。その年の十一月に雑誌『白百合』が創刊され、暮鳥はそこに短歌を投稿し始める。ここでは木暮流星の名前を使用しており、明治三十九年までその投稿は続いた。幼いころから短歌を創作していたという暮鳥であるが、ここでも短歌を通して文学表現の成長を遂げようとしていたのかもしれない。そして暮鳥は明治三十七年に勃発した日露戦争に、神学校を休学して参加することとなる。明治三十八年には本土を離れ満州に向かうが、三十九年には帰国し、神学校に復学している。復学してからの暮鳥は説教や祈祷会での司会をしたり、夏休みには夏期伝道をしたりと伝道師らしい活動をしている。

小山茂市宛の書簡に、「小生はもう三十一文字はやめ申し候、この頃は長詩のみ作りをり候、なか／＼さかんなものに候」(小山茂市宛明治四十年五月)<sup>(年)</sup>と書いているものがある。これが短歌から新体詩に移行したことを明確に示している。暮鳥が初めて書いたとされる新体詩は、「播種者」<sup>はしゅしや</sup>という作品である。この『築地の園』という雑誌は、立教ミッション発行の月刊誌で、暮鳥が通った聖三一教会や教会関係でも読まれていた。詩の一部を引用してみると、

#### 播種者

漂渺千里風たつや

青草波の穂とゆれて

遠くのぞめば羊群れ

鷗のさまにあざむきぬ

細きは路か露ふけく

たどる遊子が初旅や

いまは往古<sup>むかし</sup>のパレステナ



タイボル山の北、据野

「聴けよ、種蒔く者いであ  
美き実刈らむと種蒔きぬ」  
「種、或るものは路近く  
落ちて小鳥の餌とはなる」

種、或るものは石の地に  
夕もまたで枯れてけり  
種、或るものは草深う  
そだてど朝蔽はれぬ

種或るものは壤沃きに  
花さき果のる幾百倍

「見よや、種、蒔く者いであ  
美き実刈らむと種蒔きぬ」

(明治三十九・十『築地の園』)

このように、「羊群れ」、「パレステナ」など、聖書を連想させる単語が登場している。

さらに暮鳥は、明治四十一年頃、蒲原有明に接近しており、それに関する記述が「半面自伝」の中に、「除隊になつて帰校して以来、蒲原有明にちかづき、短歌より長詩へとうつつた」とある。この頃の有明に、暮鳥は「春」(明治四

十一・二『文章世界』と「虫」(明治四十一・二『文章世界』を推薦してもらい、『文章世界』に発表している。そのようなことがあったため、暮鳥は、宗教世界に進むか文学の世界に進むかで迷っていたが、伝道師をしながら詩を書くという形式をとることになる。これはおそらく、詩のみでは生活していくことができないからであったのだろう。そして暮鳥は神学校を卒業し、秋田へと赴任することとなる。秋田での勤務先は秋田聖救主教会であったが、その後すぐ横手町講義所、さらにその後湯沢講義所に移ることとなる。秋田で伝道師として歩み始めた暮鳥であるが、文学に対する関心は強まる一方であった。当時の秋田には、『秋田魁新報』という地方新聞があり、暮鳥はそこに多くの作品を投稿していた。以下に引用する作品からは、爆発的な感情が窺え、暮鳥の内部には過激さが渦巻いていたことを思わせる。

若い芸術家へ

死人と火と、

狗と妊婦と、

恐怖と昼と、

夢と、愁嘆なげきとマラルメと、

爆裂弾のよろこびと、

しかして意義ある内容を、

肉の色糸で、

緊かり結べ、

生白く瘦れた頸に。

(明治四十一・十一『秋田魁新報』(第十三))

絶叫

石を打て、  
油をながせ  
家を焼け。  
妻子が何だ、  
みんな叩き起して  
父も、母も  
祖母からさきに絞め殺せ  
（ああ単調に堪へん。）  
夢の死刑！  
火のヒステリイ！  
古い世界を  
つくりかへろ。

（明治四十一・十一『秋田魁新報』（生十四））

以上の詩には過激さと恐ろしさがある。そして『聖三稜玻璃』にも「曲線」という作品がある。引用してみると、

曲線

みなその  
ひるすぎ  
走る自転車  
魚をのせ  
かつ轢き殺し  
麗かな騷擾をのこし。

(大正四・四『卓上噴水』(五十五))

というように、これにも「轢き殺し」という言葉が使われているなど、物騷さを感じさせるものがある。こういった爆発的な感情を暮鳥は内部にしまいこんでいたのである。その爆発的な感情を持つていても、伝道師としての活動は続いている。伝道師としての暮鳥は非常に熱心で信者に対しても真摯に向き合っていたようであった。例えば、朝晩問わす様々な地域に向き、訪問先で説教したり、信者の結婚問題に関わったりと、決して文学だけに重きを置いていたわけではなかった。だが、教会の人間と衝突することも多かった。暮鳥は教会の厳しい制度や考え方に反発精神を持つており、もともと爆発的な感情を抱いていたこともあつて、衝突してしまつたのだと考えられる。

暮鳥は明治四十二年の九月から十一月の間に一度、人見東明を訪ねて東京へと向かつている。そこで東明から「山村暮鳥」の名をもらい、これ以降は山村暮鳥として活動することとなる。

そして大正四年に、人魚詩社より『聖三稜玻璃』を刊行している。この『聖三稜玻璃』は、多くの批判を受け、それによつて暮鳥は追い詰められ、卒倒している。それについて、自伝では、「それに加へて自分の芸術に対する悪評はその秋に於て極度に達した。或る日、自分は卒倒した。」とある。(五十六)だが、『聖三稜玻璃』の悪評のみが卒倒の原因となつてゐるわけではない。暮鳥は雑誌『詩歌』に「ボードレール散文詩」(大正二・十一『詩歌』)という翻訳を発表している。しかし、その翻訳は間違つた部分が多く、それに対しても非難を浴びせられたのである。『聖三稜玻璃』の悪評と誤訳

による非難が重なり、暮鳥は卒倒してしまったのである。

ここまで、暮鳥が詩人伝道師になり、『聖三稜玻璃』が批判を受けた、というところにまで触れたが、次の節では、キリスト教徒として、伝道師として、どれほどの信仰心があつたのかについて触れていきたい。

## 二 信仰心の一貫性

暮鳥は、明治四十二年二月には秋田から仙台の教会へと移っている。一節でも触れたが、暮鳥は教会の人間と対立することが多かった。それは仙台でも同じで、他の牧師と喧嘩して十月には仙台を去っている。その時、広瀬川に、所持していた家具やその他全てを投棄してしまう。

明治四十四年の六月には茨城県の水戸聖公会に赴任することとなる。だが十一月には常陸太田町の太田講義所に移っている。そして次は福島県の日本聖公会平准教会に転任しており、そこから平には五年余り滞在している。その理由として、土田富士との結婚が挙げられるだろう。暮鳥と富士の二人は大正五年に結婚し、その後、二階建ての家を借りて、そこを教会としている。その教会で暮鳥は、礼拝等の儀式よりも説教に重点をおき、信者の相談にも親身になって聞いていた。信者に情熱を持つて接するのは秋田にいた時から変わっていない。教会は二階建てとはいえ、たいして規模が大きいわけではなかっただろう。場所にこだわらないところが、形式的なものを嫌った暮鳥らしい。

そして大正六年六月には平の青年たちを集め、日本聖公会平基督青年会を発足している。その会では、伝道活動や音楽会、講演会を主催するなどしていた。このことから、暮鳥は熱心に信仰心を持ち続けていたことがわかる。さらにその会では、農場で野菜を栽培し、それで得た利益を会員に分配していた。暮鳥はここで農業に関心を持ち、自然に触れることに喜びを感じていたのではないかと考える。また、この「自然との触れ合い」に関して、大正四年に小山義一宛に送った手紙に、

大正4年年月不明 福島県平町より  
群馬県堤ヶ岡村 小山義一宛 はがき

この家に移つてから もう 三年になります 玲子のうまれたのも、此の家です ひまはりのために撮しました  
しかし やつぱり  
家よりは草の上がいい

平にて  
八九十<sup>(年七)</sup>

とあり、その中に「家よりも草の上がいい」という一文がある。この一文から、自然と共にあることに対して喜びを感じていたことが窺える。

大正六年七月に本井商羊宛に送った手紙で、

7月 福島県平町より

私は百姓をはじめます。土地すでに借りました。

私は草木のやうに生きやうとしている。

子どもになつて生れかはつた私はいま言ひ知れぬ世界と努力とを感じています。それは従来のやうな感覚上の個性としてあらはれた異常な神秘とも言ふべきものではなくて、寧ろ大きな大きな普遍的な生命の、人間としての無限の感情です。つまり自然に喰ひ込んできたのですね。ああ、ありがたい!<sup>(年十六)</sup>

というものがある。「草木のやうに生きやうとしている」という一文は、暮鳥の自然の受け止め方が穏やかなものになったことを証明しているのではないだろうか。その穏やかさが大きく表れているのが『風は草木にささやいた』では

ないかと考える。さらに、大正八年十一月に吉野義也宛に送ったはがきに興味深い箇所があるので引用する。

神と共に生きるのだ、自然の中で生きるのだ、禽獣や虫けらと生活するのだ、そして仕事をするのだ、

太陽が光をもつて温めてくれる、地は水を与へる、土は種をそこに埋めればみんな青々とのび、そして花を咲せ、その果物を食はせてくれる、

そこには貧しさがない、また富もない、食ふに足りれば貧はないのだ 貯へる必要なければ富はないのだ  
それがほんとの生活でないのか、

君の仕事も、自分の仕事もみな、神の喜ぶところあれ、人間の喜ぶところであれ、

けれど人間にのみ喜ばれて、神にすてられるものは禍である。(註十九)

以上が引用した箇所だが、ここから、「自然と人間は共存すべきである」という、暮鳥の考えを読み取ることが出来る。

また、この時丁度、『聖三稜玻璃』から『風は草木にささやいた』への転換が行われていたところであつた。この「自然に触れた」という経験も関係しているのかもしれない。

さらにこの頃、茂木正蔵宛に書いた手紙で、暮鳥の信仰心について読み取れるものがある。「キリストには宗教も教会もなかつた。そこには世界があつた。人間があつた。／人間であれ！信者ではない！／キリストにかへれ。友よ！／キリストのみ、まことに人間の友である、キリストを去つて人間は何処へ行くか。」(茂木正蔵宛大正六年十月三十日)(註二十)  
この手紙でまた、教会批判とみられる表現をしているが、それ以上に、「人間であれ」というフレーズが印象的である。農業に触れ、自然というものを理解した暮鳥は人間の真の姿、いわゆる「自然体であれ」という意味で「人間であれ」

というフレーズを使用したのではないだろうか。『風は草木にささやいた』においても、「人間」という言葉は多く登場する。ここで『風は草木にささやいた』の冒頭に置かれた「人間の勝利」を引用してみたいと思う。

### 人間の勝利

人間はみな苦んでゐる

何がそんなに君達をくるしめるのか  
しつかりしろ

人間の強さにあれ

人間の強さに生きろ

くるしいか

くるしめ

それがわれわれを立派にする

みろ山頂の松の古木を

その梢が烈風を切つてゐるところを

その音の痛痛しさ

その音が人間を力づける

人間の肉に喰ひいるその音のいみじさ

何が君達をくるしめるのか

自分も斯うしてくるしんでゐるのだ

くるしみを喜べ



人間の強さに立て  
恥辱はぢを知れ

そして倒れる時がきたらば

ほほゑんでたふれろ

人間の強さをみせて倒れろ

一切をありのままにじつと凝視みつめて

大木のやうに倒れろ

これでもか

これでもかと

重いくるしみ

重いのが何であるか

息絶えるとも否と言へ

頑固であれ

それでこそ人間だ

(大正六・九 『感情』  
(註二十一))

このように、この詩は「人間とは」とは何かについて考えている。『風は草木にささやいた』の特徴として、「人間」というものについて考えている詩が多いことが挙げられる。そして小説「十字架」においては、「必要なのはたつた一人のキリストです。真実に生きる人間です。命を懸けての仕事をするところの人間です。そこに真の宗教があります。」(註十二)という描写がある。やはり暮鳥は「人間とは何か」というものについて考えていたことがわかる。

大正七年一月には水戸のステパノ教会に転任になり、暮鳥は平の町を出ていくこととなる。それにより、日本聖公会

平基督青年会は自然消滅してしまう。だがこの頃、暮鳥に肺結核の症状が現れ始める。ここから暮鳥は亡くなるまで病に苦しめられることとなる。肺結核であることが判明した後、医師のすすめで静養しなくてはならなくなるが、その時伝道師を休職扱いにするという旨の通知が届いてしまう。大正八年の六月頃から、十二月頃まで休職扱いにし、その後治らなければ退職せねばならない、という旨が暮鳥に伝えられた。それに関して、

これが現代社会のやり口です。愛の福音も何もあつたものか。使へるうちは馬車馬のやうに、そうして駄目になれば追払ふのです。今から死刑の宣告をうけているようなものですね。（本井商羊宛大正八年六月）（五十三）

と怒りを顕にしている。またここで、教会に対する嫌悪感が強まってしまったであろうことが見て取れる。そしてこの通知を期に、暮鳥と教会の關係は切れるのである。教会と離れた暮鳥は、童話を書く事に熱中することとなる。童話については、今回のテーマの範囲外なので詳しく述べることはしないが、病床についてからはもっぱら童話の製作に勤しんでいたのであつた。

また、教会に関する怒りを表している手紙があるので引用する。

大正6年10月30日 平町より

山形市十日町村井旅館 茂木正蔵宛 封書

教会のこと、いやはや鼻持ちがならない。

その教会の馬鹿らしさから超越する時、人間はじめてクリスチヤンになるのだ。  
宗教つてものはその馬鹿らしさにあるのだ。

第一、彼等が他をおしへるだけの、キリストを紹介するだけの資格があるか、人格があるか。理解と同情がある

か、それからしてゼロではないか。みな蛆虫だよ、教会といふ屍にたかつて群つてゐるあのざまはよ！  
けれど彼等をあはれめ！彼等はあんなだから、何といふみずぼらしさだ！  
(注二十四)

これを見ると、教会のやり方に対して理不尽さを感じている暮鳥の怒りを感じることができ。さらに教会の者を悲しみ、可哀想だと感じている。それは、自分に非はない、という悔しさを感じていたからではないだろうか。

大正九年以降は、暮鳥は病に苦しめられながらも、童話や詩集『雲』の製作に入っている。病と闘いながら童話や詩を作ることは容易ではなかったであろう。暮鳥が伝道師を休職してから、クリスチャンとして、伝道師として活動した記録は、私の調べた限りでは先行研究や書簡には見られない。教会と縁を切つてからというもの、伝道師として活動する機会を設けられなかったのだろうか、それとも他の者に説教や礼拝をする余裕がなかったのだろうか。だが、そのような苦しみの中でも、暮鳥は信仰心を捨てることはなかった。むしろ、苦しむことによつてますます神の存在を感じ、人間として強くなつていったようであつた。その根拠となる描写が「十字架」の中にも登場する。

（自分には自分の道がある。それがどんなに酷い苦しみでも、その道を行くほかないんだ。それがまた万人の道でもあるんだ。—— 生きることだ。生きることだ、そしてくるしむことだ。くるしめばくるしむほど力がでくるにちがひない。打て！それは俺を力強くするばかりだ。）  
(注二十五)

この暮鳥の考えと同じような考えが聖書の中にも登場するので、引用してみる。

「コリントの信徒への手紙」 十章十三節

あなたがたを襲つた試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備

えていてくださいます。<sup>(註二十)</sup>

### 「コリントの信徒への手紙Ⅱ」 十二章九節

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。<sup>(註十七)</sup>

暮鳥は聖書に書いてあることを忠実に信じていたのである。暮鳥は、「苦しみの中でも神はともにいてくださる」という教えを、教会と縁を切ったからといって捨ててはいなかったのである。貧困や病に苦しめられる中、誰もが嘆くはずである。だが、暮鳥はそうではなかった。これは暮鳥の信仰心によるものであろう。晩年は伝道をして歩くことはできなくなっていたが、暮鳥が生涯伝道師であったことに変わりはないし、信仰心をなくしてはいなかったのである。

## 三 暮鳥にとつてのキリスト教

暮鳥にとつてのキリスト教とは、一体どのようなものであったのだろうか。幼い頃から暗く、和やかさの無い人生を送ってきた暮鳥にとつて、継ることのできる数少ないコンテンツが「キリスト教」であったのだろうと考える。最初は言語の習得という目的から入り、その奥にある精神に興味をひかれクリスチャンになった暮鳥であるが、亡くなるまでその信仰心を捨てることはなかった。それほど彼のキリスト教というものに対する情熱は凄まじいものがあつたのだろう。

『聖三稜玻璃』を刊行するまでの暮鳥は、キリスト教に対して迷いがあつた。というのも、聖三一神学校の卒業を前にした暮鳥は文学の道へ進むか宗教の道を進むかで迷っていたのだ。心の支えでもあつただろう宗教の道に進みたいが、文学への関心も捨てられず、それだけで食っていくこともできない。それは葛藤とも言えるものであつただろう。

『風は草木にささやいた』所収の作品を書き始めてからの暮鳥は、キリスト教に対して迷いというものが消え、嫌悪感を抱いていた教会とも円満な形では言えないが縁が切れ、自分を縛り付けていたものがなくなり、解放されている。この間にあるのは、自然との触れ合いと、『聖三稜玻璃』の批判、詩の誤訳による卒倒の経験であった。暮鳥は福島平の自然に触れ、自然というものに目覚めた。これを田中清光は「自然への開眼」と語っている。自然への開眼とは、「自然への開眼とは、すなわち人間への開眼にほかなるまい。自然と同梱なる人間存在への開眼が、そこにある。」と田中は語る。

亡くなるまで信仰心を失わず、キリスト教に対して情熱を持っていたこと、自然と人間は共存すべきとし、「人間とは何か」について意識していたこと、以上を踏まえると、暮鳥は「神」「自然」「人間」に強い繋がりを感じていたことが分かる。

## おわりに

暮鳥にとって、キリスト教は、英語を学ぶために触れたものであったが、ウォールによって心を動かされていき、次第にのめりこむようになる。宗教世界に進むか文学世界に進むかで迷っていた暮鳥であったが、伝道師をしながら詩を書くという形式を取ることとなる。

伝道師としての暮鳥は、朝晩問わず様々な地域へ出向き説教したり、信者の結婚問題に関わったりと非常に熱心であった。しかし、暮鳥は教会の厳しい制度や考え方に反発精神を持っていたため、教会とは頻繁に衝突していたようであった。

大正五年に富士と結婚してからは、自宅に教会を作り、そこで説教をした。そして大正六年には農業に触れたことによつて、自然に目覚めている。そして、「神と共に生きるのだ、自然の中で生きるのだ、禽獣や虫けらと生活するのだ、そして仕事をするのだ」という吉野義也宛のはがきや、自然と人間は共存すべきとする考えから、「自然」と「人間」

に繋がりを感じている。また、亡くなるまで信仰心を捨てず、苦しみの中で神の存在を感じた経験からもわかるとおり、キリスト教に対する情熱を持ち続けていた。そのため、暮鳥は、「神」「自然」「人間」の三つに強い繋がりを感じているのではないかと考える。よって、暮鳥にとつてのキリスト教というのは、「神」の存在のみで成立するものではなく、「神」「自然」「人間」の三つの要素によつて、成立するものではないかと考える。

注一 山村暮鳥『山村暮鳥全集 第四卷』平成二年四月 筑摩書房

注二 注一に同じ

注三 注一に同じ

注四 山村暮鳥『山村暮鳥全集 第二卷』平成元年七月 筑摩書房

注五 注一に同じ

注六 田中清光『山村暮鳥』昭和六十三年四月 筑摩書房

注七 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第十三卷』平成十四年一月 小学館

注八 注一に同じ

注九 注六に同じ

注十 注一に同じ

注十一 注四に同じ

注十二 注一に同じ

注十三 山村暮鳥『山村暮鳥全集 第一卷』平成元年六月 筑摩書房

注十四 注一に同じ

注十五 注一に同じ

注十六 注一に同じ

注十七 注一に同じ

注十八 注一に同じ

注十九 注一に同じ

注二十 注一に同じ

注二十一 注十三に同じ

注二十二 注四に同じ

注二十三 注一に同じ

注二十四 注一に同じ

注二十五 注四に同じ

注二十六 日本聖書教会『聖書 新共同訳』平成八年一月 日本聖書教会

注二十七 注二十六に同じ

注二十八 注六に同じ

注二十九 注六に同じ

注三十 注一に同じ

※暮鳥の履歴は、和田義昭『山村暮鳥研究』（昭和四十三年三月 豊島書房）による。  
引用に際して振り仮名は適宜省略した。